

JICE

No.55
October
2006

JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION CENTER

CONTENTS

- 1 Interview この人にきく
- 2・3 私の提言「途上国と日本語」
- 4・5 テーマエッセイ / 「人のつながり」
- 6 JICE NEWS / 多士彩才

Naka Interview

この人にきく

中文雄さん

中^な空^あ知^ち広^く域^い市^し町^ち村^{むら}組^{ぐみ}合^あ 事務局長
社団法人 滝川国際交流協会 理事

地域は、特性を活かせば

きつと輝きます



滝川市にも JICE 研修監理員に登録されている方がいます。地域の国際協力に尽力する人材が、徐々に滝川に育ってきていることが嬉しいですね

魅力ある地域に

自治体にとって、地域がもつ特性や条件などを利用して地域を活性化することが大きな役割の一つとしてあります。独自にセールスポイントをもった地域には、おのずと人材が集まってきます。

例えば、滝川市では、航空管制区域外であることや広大な河川敷地を活用して、青少年教育の一環と位置付けた「グライダー事業」をまちづくりの目玉としてスタートさせました。あれから24年、今やグライダーは滝川のシンボルであり、毎年シーズン中には合宿を行う大学生や本州から操縦資格取得を目指す方、遠くはヨーロッパやオーストラリアから優秀なパイロットなども訪れるようになりました。

さらに、滝川には、道立の花・野菜技術センターをはじめたくさんの研究施設が集まっていることや、農家の女性たちが集まって設立した農産加工場「とまとの家」などもあり、マラウイやブータンからの JICA 研修員をはじめとする多くの農業関係者がその農作物に関する高い技術を習得するために滝川を訪れます。

交流やふれあいから得るもの

近年、国際交流や国際協力も地域活性化の一つの柱になってきています。滝川市では、平成5年の米国マサチューセッツ州スプリングフィールド市との姉妹都市提携による市民の相互訪問や JICA 青年招へい事業による青年の受け入れ、在住外国人との親睦を図る国際交流の夕べなど、多彩な交流活動を行っています。滝川市のみならず周辺地域の多くの方々に参加していただいて、まちづくりに寄与していくことが大切だと思っています。

現在は、病気とたたかう子どもたちとその家族が医療関係者とともに自然を体験する、緑豊かな森や夢の広がる「そらぶちキッズキャンプ」施設造りに取り組んでいます。米国で名優ポール・ニューマンが中心となって開設されたキャンプ施設ですが、滝川のもつ卓越したポテンシャルがアジアで初めて適地と認められましたので、「創る会」を立ち上げ、その一員として活動しています。平成16年から実施しましたプレキャンプでは、全国から参加していただいたボランティアからも、自分への癒しになったとの声も多く聞かれ、参加者間の相乗効果も期待できることがわかりました。

これからも、滝川に多くの人が集まり活動し、地域住民と相互に影響を与え合うことで、地域が活性化されることを大いに期待して、滝川でのさまざまな事業を推進することができたらと思います。

なか ふみお 昭和17年北海道生まれ。自治大学校修了。昭和38年より滝川市勤務。企画課長、生涯学習部長、総務部長、収入役を歴任。同年4月より現職。JICEとは滝川国際交流協会が受入機関となる JICA 研修、青年招へい事業、草の根技術協力、JICEからの講師派遣などで関わりがある。

私の提言 途上国と日本語

言葉と文化を学ぶ意義

開発途上国からの研修員が日本の技術や知識の修得を目指すとき、日本語を学習し知識を得ていれば、研修はさらに実り多いものとなる。研修員と日本人の相互理解も進み、円滑なコミュニケーションが期待できるようになるのである。

小林 明美 (元大阪外国語大学教授)



クラスの留学生たちと、授業のあとで(大阪外国語大学)

日本語の普及

近年、世界の国々・諸地域では、日本語の教育機関が増え、日本語教師が派遣され、日本語の教材が整備されて、学習の機会は増えてきた。開発途上国においても日本語の学習は可能になってきている。世界において日本語学習者は増加し、日本語は普及してきたと言える。一方、来日する留学生や研修員には、大学をはじめとする諸機関で日本語教育が行われている。短期間のコース、長期間のコース、学習者の目的別のコースなど教育内容の多様化も進み、日本語教育は充実しつつあるようだ。

留学生・研修員の来日目的と日本語

留学生や研修員が日本に来る目的は、自分の専門分野を研究・研修することである。留学生は大学や大学院で学位の取得を目指し、研修員は技術や知識の獲得を目的とする。彼らが日本語を学ぶ理由は、自分の研究や研修の手段として必要だからである。大学や研修機関での生活を円滑に送り、専門分野の情報を得るために必要な言葉を「聞く、話す」技能、「読む、書く」能力を習得したいと思っ

いるのである。

しかし、日本語の能力を身につけることは研究・研修手段として必要であるが、言葉についての知識を得ることは別の意味がある。実用的な手段としてだけでなく、日本語の構造や表現、用法についての知識を得ることによって、日本人の発想や文化を理解することができるのである。言語を通して異文化に接することは、異文化理解の最も確実な方法であろう。JICA大阪国際センターで受け入れている開発途上国の研修員の場合も、彼らへのアンケートではほとんど全員が日本語を学ぶことに積極的であるという結果が出ており、日本語の学習の機会が提供されている。

オリエンテーションの講義

研修員は来日後の一週間にわたるオリエンテーションの講義によって、日本についての一般的な知識と情報を得ることができ、オリエンテーションの講義は、開発途上国の研修員の特徴を考慮して、日本への理解を可能にし、日本での滞在に役立ち、彼らの関心が高く、情報量の多い内容でなければならない。しかも、彼らは日本文化や言葉の専門家ではないし、

セッションを行う方法をとる。

講義のテーマは、現代日本社会と日本人、日本の教育、日本の経済、日本の歴史文化、日本の政治行政、そして日本語の特徴と日本人・社会である。研修員はどのテーマの講義にも熱心に参加し、前もって考えたりその場で感じたことを率直に発言する。近年日本に

講義「日本語の特徴からみた日本人と日本社会」

POP Sを研究テーマにする者もいて、マンガを用いた日本語教科書を作成した学生もいる。

このオリエンテーションの講義では、日本語そのものを教えるのではなく、日本語を通時的、共時的にみて特徴を明らかにし、それが日本文化、日本人の考え方や行動にどのように表れているかを検討する。例えば中国語から取り入れた漢字や漢語の日本化、日本語の語彙の特徴、敬語法、発話法、表現形式、用法の特徴などから彼らは日本語と文化についての知識を得るが、同時に日本語との比較によって自国語や自国の文化を内省するようになる。これによって

日本語や文化に対する理解がさらに深まる。日本語は古代から中国の言葉と文化から影響を受けている重要な要素を取り入れてきたが、すべてを日本語化する努力をした。そこで研修員からは、なぜ日本人は中国語を国語として取り入れなかったのかという疑問が出される。また、日本人は近代に欧米の思想や言葉を多く取り入れたが、その言葉、英語やフランス語は借用語として日本語の語彙の中に組み入れられた。研修員からは、日本人は日本語の文の中に英語の文を挿入して、日本語文と英文を交えて使うことはないのかという疑問が出てくる。日本人にとってはごく当たり前のことが、研修員にとっては疑問に思われるのである。開

発途上国の国々の言語事情との比較から生まれる疑問である。

研修員と日本語

研修員は短期滞在者が多く日本語の使用の機会が少ないため、自国に帰れば日本語に接する機会はほとんどなくなる、したがって日本語を学習するためにわざわざ時間を割くことは能率的ではない、それぞれの専門だけに集中すべきである、という日本語学習に否定的な意見もある。しかし、研修員の専門分野が何であれ、彼らの探求する対象は日本の技術や理論なのである。もちろんそれらは日本人の発想や日本文化を背景として生まれきたものである。直接役に立たないからといって、日本語や日本文化の知識をないがしろにするべきではない。より効率的で実りの多い研修を目的とするならば、日本語についての知識を得るために少々時間を割いてほしい。急がば回れ、である。

オリエンテーションの講義の効果は、研修員が日本で生活・研修する間に日本社会のさまざまな現象に触れるとき、それを理解する助けとなると私は信じている。



こばやし あけみ
京都大学文学修士。カナダ・トロント大学M.A.取得。昭和53年から平成17年まで大阪外国語大学で国費留学生に対する日本語や日本事情教育に従事する。平成3年から9年まで大阪外国語大学留学生日本語教育センター・センター長を勤める。平成6年のJICA大阪国際センターでのオリエンテーションの講義の立ち上げに携わり、現在も講義を担当する。平成17年4月から平成18年1月までハンガリー国エトヴェシ・ロランド大学客員教授を勤める。



“人のつながり”って何だろう？ 自分にはかできない「JICA」 出会う機会は必ずあります

生活者の視点からラオスの人たちを支援

チャントソン・インタヴォン（NPO法人ラオスのこども 共同代表）

母親になって実感したこと

日本人と結婚し日本の社会での子育てを通して生活者としての視点から感じるものがたくさんあります。子どもは文字が読めない赤ちゃんの頃から「絵本読んで」とせがみます。娘が絵本を見るとき目の輝きを見るたびに、私には絵本との幸せな出会いの記憶がないことを痛感しました。ラオスでは絵本がなく、本との出会いは学校の教科書でした。子どもは本が好きになったら自分から教育を受け入れることも実感しました。学生時代は児童教育や教育学を学び、頭ではわかっているつもりでしたが、子育てという実践にまざるものはありません。それが絵本を祖国ラオスの子どもたちに送る活動の出発点でした。

絵本を読む喜びを送る

当初は、娘の保育園の母親たちと呼びかけて日本語の絵本を集め、バザーで古書を出し合って売ったお宝。また、子どもたちだけではなく教師の意識も変わる必要があります。読書力がなければ教科書を読んでも内容を理解できませんからね。そのため、全国の教員養成学校の先生を対象としたセミナーを行い、読書力の重要性、図書室の在り方、本の使い方、教材としての使い方を教えています。

女性の自立を目指して

もう一つ私自身が力を入れているのが、平成10年にラオスに作った女性のための職業訓練センターです。地方では今日の食糧にも事欠く家庭が多く、特に女の子は労働力として子守や親の手伝いで学校に行かせてもらえません。そこで、女性の自立支援のために、日本でラオスの織物や民芸品を販売して資金を作ったり、JICA開発福祉支援事業の開発パートナーとしてホアイホン職業訓練センターの研

金で本を送っていました。そのうちラオスが好きな仲間が集まるようになり、「ラオスに絵本を送る会」（現「ラオスのこども」）を設立しました。平成4年からラオス国立図書館が実施する小学校に図書室設置または図書箱を送る国家プロジェクト「読書推進運動」に協力し、平成14年からJICA草の根技術協力開発パートナー事業の実施団体として活動しています。

あるとき日本語の絵本を見たラオスの子どもから、「何で書いてあるの？」と言われ、ラオス語に翻訳する必要を感じました。平成2年にユネスコアジア文化センターの課長だった田島伸二さんが書いた創作童話『ヒツクリ星』の翻訳を皮切りに、『窓ぎわのトトちゃん』『人魚がくれたさくら貝』など日本の作品やラオス人が作った絵本など約125タイトルを翻訳・出版し、450万冊を印刷しました。また、ラオスではこれまで植民地政策のために自国語であるラオス語の教育は重んじられていなかったため、子ども用のラオス語の辞書も制作しました。

修棟・生産棟と寮を建設し、研修を実施してきました。また、織物と縫製などの服飾技術だけではなく、生産・販売・運営の発想や手法の修得も目指しています。

いろいろな機会を知り合う方々のなかには、私たちの活動の心強い協力者になってくださる方もいます。職業訓練センターで指導をしていた方には、初年度のラオス青年招へいの通訳で知り合った高知の織物作家の方や工房を立ち上げて縫製一筋でこられた今年85歳になる方もいます。ご自分の技術をラオスの人々に伝えたいという強い意志とご厚意で支えてくださっています。

より多くのラオス人のために

日本人とラオス人は気性が似ていて、相通じるものがたくさんあります。出会うきっかけがあると、皆さんがラオスを好きになってくれます。ラオスに赴任した青年海外協力隊員は皆さんラオスびいきになるそうですよ。

今は、自分の時間をできるだけラオス人のために使いたいと思っています。以前は大学で講師をしていましたが、4年前からJICEの研修監理員になりました。JICAの研修の現場で1人でも多くのラオス人研修員のために、日本語・ラオス語がわかる私が役に立ちたいと思ったのです。

そのほかにも、ラオスに仲間たちと日本語学校やゲストハウスを作っています。楽しいですよ、人生は、人に会うのが好きなんです。（談）



上)織物の研修を受けるラオスの女性
下)製品を身につける研修生たち。草木染めの絹織物で作られた「シン」（巻きスカート）



Chan thasone NTHAVONG

昭和28年ラオス・ヴィエンチャン市生まれ。昭和56年お茶の水女子大学大学院人文科学研究科卒業、昭和61年東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程修了。昭和57年NGO「ラオスの子どもに絵本を送る会」（現・NPO法人「ラオスのこども」）設立。平成3年「ラオスの女性とともに仕事を作る会」、平成10年ホアイホン職業訓練センターを設立、代表を務める。平成4年日本青年会議所TOYP大賞'92受賞、平成11年毎日新聞国際交流賞受賞。平成13年「アジア人権賞」（アジア女性・人権特別賞）受賞。本年10月に著書『ラオスの布を楽しむ』出版予定。平成14年よりJICE研修監理員。

注1: 平成14年12月から平成17年12月(第1フェーズ)および平成17年12月から平成20年12月(第2フェーズ)
注2: 平成10年12月から平成13年12月(3年間)



送られた絵本を読む子どもたち
(写真提供/NPO法人ラオスのこども)

テーマエッセイ「人のつながり」って何だろうとは
さまざまな分野で活躍する方に、一つのテーマやキーワードから「人のつながり」を語っていただく企画です。
JICEが目指す人と人とのつながりをあらためて考えるきっかけにしています。



人と人をつないで支えます国際協力



これからも「現場」感覚を常に意識し、業務に取り組んでいきたいと思っています

JICEには、多彩な専門分野をもつスタッフが、人と人をつなぐ架け橋として活躍しています。個性豊かな横顔を紹介していきます。

国内外の現場で、国際協力のコーディネーション能力を磨いています

国際交流部留学生業務課
カンボジアJDSプロジェクト事務所 プロジェクト・コーディネーター
横堀 慎二さん

JICEスタッフに求められる資質は、コーディネーション能力だと実感しています。「コーディネーション」とは、意見調整、意見集約など、相手方を尊重しつつその中の到達点を探っていくことです。例えば、プライベートで続けているアマチュアオーケストラでは、楽団員はさまざまな音楽背景、技術レベル、思い入れをもった人間の集合体で、楽譜という共通の目標（到達点）に向かって練習を重ねます。指揮者である私は、楽譜の奥に書かれた意図を楽団員に伝えることで曲に魂を吹き込み、調和（ハーモニー）を作っていきます。

JICEの業務も同じです。北海道支所勤務時は、JICAの本邦研修の現場でJICA担当者、研修受入先、研修員など関係者の間に立って積極的に提案を行い、意見を調整し、より効果的な研修を実施するために奔走しました。JICEは国際協力の一翼を担う組織であると同時に、国際協力に係るサービスを提供する組織であることをあらためて認識しました。

現在は、留学生支援無償（JDS）事業に携わっています。私は11カ国ある対象国のうちカンボジアとミャンマーの担当であり、カンボジアJDSプロジェクト事務所のプロジェクト・コーディネーター

を兼務しています。留学生の募集・選考に関する業務実施のために、日本側と先方政府との間に立ち、人と人、組織と組織、事業やプロジェクトに対する進め方や考え方など、さまざまな要素の「温度差」を調整するのがプロジェクト・コーディネーターの業務です。事務所の現地スタッフと協力しながら、JDS事業の目的や方向性を見据え、根気強く関係者への説明、交渉などを行っています。関係者の理解を促すことができ、共通の理解を深められた瞬間に醍醐味を感じます。

「JICEらしいコーディネーション」には、JICEスタッフが「人と接する」現場を経験する中で高めた「人間力」を生かしたコーディネーションが重要と考えます。「人に始まり、人に終わる」のがJICEの仕事です。一期一会に終わらない、継続的なネットワークの構築を目指したいと思っています。

横堀さんの JICE歴	H13年7月 H13年7月～H15年8月 H15年9月～H17年10月 H17年11月～H18年3月 H18年4月～現在	入団 広報部情報業務室（JICA図書館） 北海道支所 国際交流部留学生第二課 国際交流部留学生業務課所属 プロジェクトコーディネーターとして カンボジアJDSプロジェクト事務所勤務
----------------	--	--

JICE NEWS

留学生支援無償事業の対象国が11カ国に キルギス共和国におけるJDS事業の立ち上げ

6月27日、首都ビシュケクで先方政府とのエージェント契約署名式が行われ、キルギス共和国との留学生支援無償事業が開始されました。実施機関となる国家公務員庁のトクトマトフ長官ほか現地関係者が寄せるJDS事業への期待は非常に高く、契約署名式では、同長官から「今、我々は次の一步を踏み出す時である。キルギス共和国独自の専門的かつ揺るぎない国家公務員制度の確立のため、我々は決意し、行動していかなければならない」とのコメントが述べられ、本事業に対する強い意気込みが示されました。



契約署名式（右からトクトマトフ国家公務員庁長官、木下専務理事）

JICEスタッフが大学生を対象に講師を務める

JICEの国際協力を紹介 / 獨協大学

6月27日、獨協大学からの依頼で、職員と研修監理員の2名が、全学部生対象の講座「国際協力の理念と実践」で、約200名の学生を対象に講義を行いました。最初に職員が、JICEの事業紹介、研修事業を国内で行う意義、JICEが国際協力に果たす役割について説明を行い、続いて研修監理員が、研修の現場での体験談を中心に講義を行いました。

研修の現場での「言葉」を講義 / 神戸大学

7月3日、関西支所（兵庫）所属の研修監理員が、神戸大学農学部で3年生54名を対象に「国際協力・交流の視点から」と題した講義を行いました。これは、JICAの研修で係わった同大の教授からの依頼によるものです。研修監理員は、異文化交流における言葉（英語）の役割について、研修の現場での体験談を交えながら講義を行いました。



講義を行う研修監理員（神戸大学にて）

JICE は平成 19 年 3 月 25 日に設立 30 周年を迎えます

皆さまの声をお聞かせください

広報紙『JICE』に対するご意見、ご感想、ご質問、今後取り上げてほしいテーマや人物などを、下記アドレスへメールでお寄せください。
広報紙『JICE』編集事務局 e-mail: kohoshi-jice@jice.org



古紙配合率100%再生紙を使用しています

平成19年9月20日発行 編集発行人：木下 建 発行所：財団法人日本国際協力センター（ジャイス）
〒160-0023 東京都新宿区西新宿六丁目10番1号 日土地西新宿ビル20・21階 TEL.03-5322-2500 FAX.03-5322-2520 http://sv2.jice.org

私たちJICEは、個人情報保護法を遵守し、徹底した個人情報の管理をいたします。